

本学幼児保育学科生の保育者としての資質向上に関する研究 — 「実技発表」の学習効果に関する調査—

佐野 友恵*¹ 廣橋 容子*² 山尾 正之*³ 朝倉 洋*⁴

Student Progress in Child-care Worker Qualities — The effect of student presentations —

Tomoe Sano*¹ Yoko Hirohashi*² Masayuki Yamao*³ Yo Asakura*⁴

Abstract

In the Department of Childhood Education and Welfare, students who are intending to become child-care workers receive college instruction, perform practical work at the preschool, and deliver end-of-year presentations detailing the skills they have learned in the preceding year. In the process of steadily improving their abilities over the two-year duration of the course, students are expected to have acquired communication skills and planning ability, and to have become adept at expressing themselves.

This year they were required to complete a questionnaire to evaluate the effect of their end-of-year presentations on child-care education, and also to assess for the qualities essential in child-care workers.

The results showed that they improved their communication skills, gained a strong sense of accomplishment and heightened their child-care skills. The child-care skills presentations by students thus demonstrated the effectiveness of the junior college course.

キーワード

資質、保育者養成、実技発表、学習効果

* 1 さの ともえ：大阪国際大学短期大学部講師 (2009.12.21受理)

* 2 ひろはし ようこ：大阪国際大学短期大学部准教授

* 3 やまお まさゆき：大阪国際大学短期大学部教授

* 4 あさくら よう：大阪国際大学短期大学部教授

1 調査目的および課題の所在

1.1 課題の所在

「子どもの権利条約」¹⁾に、子どもが最善の利益を受けることが社会にとって最も優先して実現すべき課題のひとつであると示されているように、子どもたちの健やかな成長・発達は、十分な援助によって保障されなければならない。

日本では少子化が進み、次世代の担い手として十全に育てられるべき子どもの人口が減少しているうえに、昨今の社会の混沌とした諸相や地域構造の変化により、子どもたちが伸びやかに育ちにくい状況が出現している。社会のひずみの影響を受けやすい子どもが、不安なく成長できるよう、さまざまな努力が求められている。国や市町村の行政が公的責任を果たし、子どもの福祉を実現する仕組みの強化が志向されるべきであるのは当然であるが、他方、実際に保育所や幼稚園といった保育の現場で、日々子どもや保護者、地域の人々に接する専門職としての保育者の質的向上も重要な課題といえる。

平成20年に改訂された幼稚園教育要領²⁾および保育所保育指針³⁾にも表れているように、保育者に求められる専門性は年々多様化するとともに高い質が求められている。子どもの多様化、保護者の多様化、そしてそれらを取り巻く地域社会の多様化といった多くの変化に柔軟に対応していくためには、現職の保育士・幼稚園教諭の研修の拡充だけでなく、保育者として養成される段階から、保育の現場に向き合う気力と行動力、対人コミュニケーション能力、柔軟な思考力、常に自らの専門性を高めていこうとする積極的な姿勢を育むことが重要と思われる。このような保育者となるための基礎となる力の上に、地域での子育て支援機能や、育児不安を抱える保護者への対応、虐待・貧困等の現代社会の抱える問題への深い理解なども視野に含んだ優秀な保育者の輩出が、養成校にいま求められているのではなかろうか。

大阪国際大学短期大学部幼児保育学科では、「実技発表」の取り組みを実践している。1年次の夏休み直前には、夏期幼児教育研修においてゼミごとに「実技発表」を行い、その経験を基礎として2年次の卒業直前に学習の集大成として実技発表会を位置付けている。前述のように優れた資質をもつ保育者の養成が求められる状況にあって、本学科が取り組んでいる「実技発表」の学習効果が、保育者としての資質の向上にどのような影響を与えているのかを明らかにし、2年間の養成課程の中で「実技発表」をより教育効果の高いものとするべく、今回の研究では「実技発表」の取り組みが保育者としての資質を伸ばし、卒業後に役立つ有効なものであるという仮説を立て、調査を実施した。

1.2 保育者としての資質について

まず保育者としての資質とは何かという定義が明らかでなければならない。保育者としての資質に関連する研究は多くあるが、一般的に確立された定義がない。

そこで今回は、どのような資質が必要とされるか、幼稚園・保育所に就職した卒業生に対するインタビュー調査を実施して、保育者が考える、保育現場で必要とされる「資質」の要素を抽出した。その上で、日常業務を通じて、常に対人援助を行うという保育者の特性に鑑み、社会福祉援助技術（ソーシャルワーク）の実践者として求められる「資質」を

参照して、質問紙の質問項目として使用した。「協調性」「コミュニケーション能力」「リーダーシップ」「表現力」「技術（歌・踊り・楽器演奏等）」「他者の気持ちになれること」「企画立案能力」等を保育者としての資質として抽出した。2008年度2年次生を対象とした実技発表前・実技発表後の2度に渡る調査および卒業生向けの郵送調査では、ここで抽出した項目を中心に質問紙を作成した。

2 調査概要

本研究の実施にあたり、4つの調査を実施した。

①インタビュー調査

対象：6名(本学幼児保育学科卒業生の幼稚園教諭もしくは保育士経験者)
時期：2008年8月

②質問紙調査（郵送）

対象：50名(本学幼児保育学科卒業生の幼稚園教諭もしくは保育士経験者)
有効回答数 24、有効回答率 48%
時期：2008年12月～2月

③2008年度「実技発表会前」の調査⁴⁾

対象：2008年度 2年次在籍者全員（167名）
有効回答数 134、有効回答率 80.2%
時期：2008年12月

④2008年度「実技発表会後」の調査

対象：2008年度 2年次在籍者全員（167名）
有効回答数 153、有効回答率 91.6%
時期：2009年1月

3 幼児保育学科における「実技発表」の位置付け

【1年次】

幼児保育学科では1年次の夏（2008年度は7月）に保育・音楽コースは「保育技術演習」の中で、体育コースは「キャンプ実習」の中で「実技発表」を経験する。

この「実技発表」は「保育技術演習の一環として幼児教育に必要とされる技術の基礎を修得する」ことを目的とし、10分程度の発表時間の中で「幼児教育に関する器楽演奏・歌・劇・ダンス・運動遊びなどを発表し、全員が舞台に立つ経験をする」ことが学科から学生に向けて示された内容である⁵⁾。

短期大学へ入学して数ヶ月後にあるこの「実技発表」に向けて、入学直後から幼児教育演習Ⅰのクラス（通称ゼミ）毎に、「実技発表」の内容を考え、衣装や舞台装置を作製し、発表に向けて練習を重ねる。それぞれの学生が入学前の経験、自らの趣味や特技をいかし

て発表内容の完成に向けて努力を重ねることでゼミとしてのまとまりが生じ、またゼミ生同士の個性を互いに理解し認め合えるようになる。つまり、「実技発表」は単に保育技術の修得という意味合いだけでなく、良好な人間関係の中で学習を円滑に進める基礎作りとしての効果も有している。

【2年次】

幼児保育学科が擁する3コース、すなわち「保育コース」「音楽コース」「体育コース」の2年次生全員が卒業前（2008年度は2009年1月）に「幼児教育演習Ⅱ」の一環として「実技発表」を実施している。本学のメモリアルホールを使用し、目的や内容等は1年次の「実技発表」に準じながらも、その内容は近い将来、幼稚園や保育所等で子ども達の各種発表会の指導を他の保育者と協力しあって運営・指導する保育者として必要な知識・技術・心構えを身に付けることをより意識したものとなっている。

卒業論文を課さない本学科の中では、学生達にとって「卒業前の集大成」としての意味合いの強い行事である。

なお、1年次生は2年次生の実技発表会を「幼児教育演習Ⅰ」の一環として見学参加する。これにより、自分達が夏に経験した「実技発表」と2年次生の発表内容とを比較し、課題を見つけたり次年度の「実技発表」に向けての期待や意欲を持ったりする者も見受けられる。

4 調査結果および考察

4.1 実技発表の「感想」および「効果」

表1は「実技発表」後の感想に関する質問項目の集計結果を抜粋したものである。その項目について見ても学生の感想は一様に肯定的なものであり、「実技発表」を終えた時に達成感を感じられた」「ゼミの仲間との関係が深まった」「実技発表」は保育者になるために役立つ経験だった」「実技発表」を楽しんだ」「実技発表」を通して成長した」「実技発表」をしてよかったと思う」といった質問項目については「とてもそう思う」「そう思う」という肯定的回答の合計は9割を超えている⁶⁾。

表1. 「実技発表」後の感想

		度数	列 %
「実技発表」を終えた時に達成感を感じられた。	とてもそう思う	98	64%
	そう思う	49	32%
	どちらとも言えない	6	4%
	そう思わない	0	0%
	全くそう思わない	0	0%

		度数	列 %
「実技発表」は保育者になるために役立つ経験だった。	とてもそう思う	77	51%
	そう思う	63	41%
	どちらとも言えない	12	8%
	そう思わない	0	0%
	全くそう思わない	0	0%

		度数	列 %
「実技発表」に積極的に取り組んだ。	とてもそう思う	85	56%
	そう思う	50	33%
	どちらとも言えない	17	11%
	そう思わない	1	1%
	全くそう思わない	0	0%
「実技発表」をしたことでゼミの仲間との関係が深まった。	とてもそう思う	87	57%
	そう思う	54	35%
	どちらとも言えない	11	7%
	そう思わない	1	1%
	全くそう思わない	0	0%
「実技発表」をしたことで自分が自信が持てた。	とてもそう思う	74	48%
	そう思う	49	32%
	どちらとも言えない	27	18%
	そう思わない	3	2%
	全くそう思わない	0	0%
「実技発表」をしたことで課題を見つけたことができた。	とてもそう思う	62	41%
	そう思う	63	41%
	どちらとも言えない	27	18%
	そう思わない	1	1%
	全くそう思わない	0	0%
「実技発表」をすることで短大生活が楽しくなった。	とてもそう思う	77	50%
	そう思う	54	35%
	どちらとも言えない	20	13%
	そう思わない	2	1%
	全くそう思わない	0	0%

		度数	列 %
1 回生時の「実技発表」の経験が2 回生時の「実技発表」に役立った。	とてもそう思う	80	52%
	そう思う	57	37%
	どちらとも言えない	15	10%
	そう思わない	1	1%
	全くそう思わない	0	0%
「実技発表」を楽しんだ。	とてもそう思う	107	70%
	そう思う	37	24%
	どちらとも言えない	9	6%
	そう思わない	0	0%
	全くそう思わない	0	0%
「実技発表」を通して成長した。	とてもそう思う	90	59%
	そう思う	47	31%
	どちらとも言えない	15	10%
	そう思わない	1	1%
	全くそう思わない	0	0%
「実技発表」をしてよかったと思う。	とてもそう思う	99	65%
	そう思う	50	33%
	どちらとも言えない	4	3%
	そう思わない	0	0%
	全くそう思わない	0	0%

表2は「実技発表」の具体的な効果を確認するための質問項目の集計結果を抜粋したものである。この質問項目は卒業生（幼稚園教諭・保育士）を対象としたインタビュー調査で抽出した保育者として必要とされる資質を中心に質問項目を構成した。表1からうかがえる「実技発表」をしたことによる達成感の高さが、単に「楽しい行事」という感想に基づくものではなく、保育者としての資質の向上につながっていることを確認することができる。

保育に必要とされる技術面の能力について確認するならば、「表現力が向上した」という項目について「とてもそう思う」+「そう思う」の合計は86%、「歌や踊り、楽器演奏等の技術が向上した」という項目については「とてもそう思う」+「そう思う」の合計は90%と高率である。実際、1年次の発表内容に比べて、発表内容の質の高さは歴然としている。「実技発表」が卒業前の幼児保育学科での学びの「集大成」であることを考えるならば、この保育技術の向上という効果は、「実技発表」の成果というよりも、日頃の授業での学びが「実技発表」に応用されたものとみるべきであろう。

保育現場での日常業務を通じて、常に対人援助をおこない、他の保育者と共に連携協力しあいながら業務を進める必要のある保育者の特性を踏まえて、対人コミュニケーション能力に関する項目も保育者に必要な資質として質問項目を構成している。「協調性やチームワークが身についた」「コミュニケーション能力が向上した」「集団を統率するコツをつかむことができた」「他者の気持ちを思いやることができるようになった」「仲間内で互いに助けあったり足りないところを補う援助ができた」「自分の意見をきちんと人に伝えることができた」といった項目がそれにあたる。これらの質問項目に対する回答傾向からも学生が保育者として、社会人としての基礎にあたる対人コミュニケーション能力を高めていることがうかがえる。

表2. 「実技発表」後に感じた効果

		度数	列 %
協調性やチームワークが身についた。	とてもそう思う	79	52%
	そう思う	62	41%
	どちらとも言えない	11	7%
	そう思わない	0	0%
	全くそう思わない	0	0%
コミュニケーション能力が向上した。	とてもそう思う	75	50%
	そう思う	55	36%
	どちらとも言えない	20	13%
	そう思わない	1	1%
	全くそう思わない	0	0%
リーダーシップを発揮できた。	とてもそう思う	51	34%
	そう思う	44	29%
	どちらとも言えない	48	32%
	そう思わない	7	5%
	全くそう思わない	2	1%

		度数	列 %
様々な企画を立案することができた。	とてもそう思う	63	41%
	そう思う	53	35%
	どちらとも言えない	31	20%
	そう思わない	4	3%
	全くそう思わない	1	1%
自発的に行動することができた。	とてもそう思う	70	46%
	そう思う	61	40%
	どちらとも言えない	20	13%
	そう思わない	2	1%
	全くそう思わない	0	0%
意欲的に取り組めた。	とてもそう思う	79	52%
	そう思う	59	39%
	どちらとも言えない	15	10%
	そう思わない	0	0%
	全くそう思わない	0	0%

本学幼児保育学科生の保育者としての資質向上に関する研究

		度数	列 %
集団を統率するコツをつかむことができた。	とてもそう思う	52	34%
	そう思う	55	36%
	どちらとも言えない	41	27%
	そう思わない	4	3%
	全くそう思わない	1	1%
表現力が向上した。	とてもそう思う	66	43%
	そう思う	66	43%
	どちらとも言えない	19	12%
	そう思わない	2	1%
	全くそう思わない	0	0%
豊かな表現になるように工夫できるようになった。	とてもそう思う	69	45%
	そう思う	61	40%
	どちらとも言えない	21	14%
	そう思わない	2	1%
	全くそう思わない	0	0%
歌や踊り、楽器演奏などの技術が向上した。	とてもそう思う	75	49%
	そう思う	62	41%
	どちらとも言えない	13	9%
	そう思わない	1	1%
	全くそう思わない	1	1%
他者の気持ちを思いやるようになった。	とてもそう思う	76	50%
	そう思う	60	39%
	どちらとも言えない	17	11%
	そう思わない	0	0%
	全くそう思わない	0	0%
自分なりのアイデアに基づき発表内容を創造することができた。	とてもそう思う	72	47%
	そう思う	56	37%
	どちらとも言えない	22	14%
	そう思わない	3	2%
	全くそう思わない	0	0%

		度数	列 %
努力することができた。	とてもそう思う	78	51%
	そう思う	65	43%
	どちらとも言えない	9	6%
	そう思わない	0	0%
	全くそう思わない	0	0%
仲間内で互いに助け合ったところを補う援助ができていた。	とてもそう思う	77	50%
	そう思う	64	42%
	どちらとも言えない	11	7%
	そう思わない	1	1%
	全くそう思わない	0	0%
困難に直面した時に問題を解決することができた。	とてもそう思う	67	44%
	そう思う	65	43%
	どちらとも言えない	21	14%
	そう思わない	0	0%
	全くそう思わない	0	0%
自分の意見をきちんと人に伝えることができていた。	とてもそう思う	66	43%
	そう思う	65	43%
	どちらとも言えない	22	14%
	そう思わない	0	0%
	全くそう思わない	0	0%
人前に立ち発表することに慣れた。	とてもそう思う	66	43%
	そう思う	62	41%
	どちらとも言えない	22	14%
	そう思わない	3	2%
	全くそう思わない	0	0%

また、項目間の相関をみるならば、「集団を統率するコツをつかむことができた」「人前に立ち発表することに慣れた」と「実技発表」をしたことで自信が持てた」（表3および表4）、「自分なりのアイデアにもとづき発表内容を創造することができた」と「実技発表」をしたことで課題を見つけることができた」（表5）、「コミュニケーション能力が

向上した」と「実技発表」をすることで短大生活が楽しくなった」(表6)といった項目間で高い相関関係にあることが分かった。

表3. 集団を統率するコツをつかむことができた

		とても そう思う	そう思う	どちらとも 言えない	そう 思わない	全くそう 思わない	合計	N
「実技発表」 をしたことで 自分に自信が 持てた	とてもそう思う	65.8	24.7	9.6	0.0	0.0	100.0	73
	そう思う	6.1	63.3	28.6	2.0	0.0	100.0	49
	どちらとも 言えない	0.0	22.2	66.7	7.4	3.7	100.0	27
	そう思わない	0.0	0.0	66.7	33.3	0.0	100.0	3
	合計	33.6	36.2	27.0	2.6	0.7	100.0	152

(単位：%)

表4. 人前に立ち発表することに慣れた

		とても そう思う	そう思う	どちらとも 言えない	そう 思わない	合計	N
「実技発表」 をしたことで 自分に自信が 持てた	とてもそう思う	78.1	17.8	4.1	0.0	100.0	73
	そう思う	16.3	69.4	10.2	4.1	100.0	49
	どちらとも 言えない	3.7	44.4	48.1	3.7	100.0	27
	そう思わない	0.0	66.7	33.3	0.0	100.0	3
	合計	43.4	40.1	14.5	2.0	100.0	152

(単位：%)

表5. 自分なりのアイデアに基づき発表内容を創造することができた

		とても そう思う	そう思う	どちらとも 言えない	そう 思わない	全くそう 思わない	合計	N
「実技発表」 をしたことで 課題を見つけ ることができ た	とてもそう思う	86.9	11.5	1.6	0.0	0.0	100.0	61
	そう思う	25.4	57.1	15.9	1.6	0.0	100.0	63
	どちらとも 言えない	7.4	44.4	40.7	7.4	0.0	100.0	27
	そう思わない	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	100.0	1
	合計	46.7	36.8	14.5	2.0		100.0	152

(単位：%)

表6. コミュニケーション能力が向上した

		とても そう思う	そう思う	どちらとも 言えない	そう 思わない	全くそう 思わない	合計	N
「実技発表」 をすることで 短大生活が楽 しくなった。	とてもそう思う	85.3	13.3	1.3	0.0	0.0	100.0	75
	そう思う	16.7	72.2	11.1	0.0	0.0	100.0	54
	どちらとも 言えない	5.0	25.0	65.0	5.0	0.0	100.0	20
	そう思わない	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	100.0	1
	合計	49.3	36.7	13.3	0.7		100.0	150

(単位：%)

クラスカル・ウォリス検定 p<.05

このように、「実技発表」は、学生にとって保育者に必要とされる資質を身につける経験と短大生活を楽しむことの要素を兼ね備えるものであったことが分かる。本学入学時には人前に立つだけで緊張し話すこともままならなかった学生も、卒業直前に行われる「実技発表」ではホールの舞台上で堂々とした発表を行っている。人前に立つこと、人前で自らを表現することを「楽しい」と思える保育者へと成長していけることは喜ばしいことである。

表7は入学前と「実技発表」後の「企画立案能力」についての変化を表したものである。この結果からもわかる通り、入学前に企画立案する力があると思えなかったり確信できなかった層が、「実技発表」後には立案することができたと思えるようになっている。「実技発表」のように学生が主体となって企画運営するような機会を設けることは、学生を成長させ、自信を持つことにもつながるという意味において重要であろう。

表7. 企画立案に関する入学前と「実技発表」後の比較

		(実技発表後) 様々な企画を立案することができた。					合計
		とても そう思う	そう思う	どちらとも 言えない	そう 思わない	全くそう 思わない	
(入学前) 創造性・企画や立案をする力があつた。	とてもそう思う	7	5	0	0	0	12
	そう思う	11	15	3	0	0	29
	どちらとも 言えない	22	21	16	0	0	59
	そう思わない	5	6	9	3	0	23
	全くそう 思わない	1	1	1	1	1	5
	合計	46	48	29	4	1	128

4.2 養成期間（2年間）における学生の成長

先の説明にある通り、幼児保育学科では2年間にわたり「実技発表」をおこなっている。1年次の夏の最初の「実技発表」の経験をもとに、1年次1月には2年次生の実技発表会の見学をし2年次の「実技発表」に向けての意欲を高めることがカリキュラム上のねらいとなっている。また2年次生の「実技発表」が卒業前に行われることから、「実技発表」が2年間の養成課程の集大成という意味合いも持っている。そこで本章では学生の2年間における成長について着目する。

表8は各質問項目について、1年次の「実技発表」と2年次の「実技発表」について比較したものである⁷⁾。どの項目についても2年次の「実技発表」の方を肯定的に捉えていることが分かる。特に「実技発表」の準備は十分だった」「実技発表」をしたことで自分に自信が持てた」「実技発表」をしたことで課題を見つけることができた」の3項目については、1年次よりも2年次の「実技発表」について肯定的な回答をした学生が半数以上にのぼっている。「実技発表」の準備を十分に行ったということは、1年次よりも行事の際の「準備」の重要性を理解したり出来る限り質の高い発表をしたいという意欲の現れであろう。また「自信が持てた」ということは幼稚園教諭・保育士として就職する直前の

学生達にとって非常に重要なことといえる。さらに「課題を見つけることができた」という項目について肯定的な回答が目立ったことは養成校にとって「実技発表」の学習効果の最たるものと考えられる。幼稚園教諭・保育士は常に自らの職務内容について振り返り、反省し、課題を見つけ、より良い保育を行うことが求められる。前述の通り、学生が「実技発表」を通して得る達成感は大きい。そのような状況下においても「課題」を見出せたことは評価に値するといえるだろう。

表8. 1年次・2年次の実技発表後の「変化」

		度数	列 %
「実技発表」の準備は十分だった。	-3	1	1%
	-2	1	1%
	-1	12	9%
	0	45	35%
	1	42	33%
	2	19	15%
	3	8	6%
「実技発表」を終えた時に達成感を感じられた。	-2	1	1%
	-1	7	5%
	0	62	48%
	1	43	33%
	2	11	9%
	3	4	3%
「実技発表」に積極的に取り組んだ。	-1	9	7%
	0	62	48%
	1	40	31%
	2	16	12%
	4	2	2%

		度数	列 %
「実技発表」をしたことでゼミの仲間との関係が深まった。	-1	9	7%
	0	64	50%
	1	49	38%
	2	6	5%
	4	1	1%
「実技発表」をしたことで自分に自信が持てた。	-1	6	5%
	0	45	35%
	1	54	42%
	2	18	14%
	3	3	2%
「実技発表」をしたことで課題を見つけることができた。	4	3	2%
	-2	2	2%
	-1	8	6%
	0	48	37%
	1	46	36%
	2	18	14%
	3	6	5%
4	1	1%	

また、今回の調査では「入学前の自分」についての質問項目を用意した。その回答と、「実技発表」後の結果を比較すると、学生が本学入学から卒業までの間に自らの成長を実感していることが分かる。表9は保育者として必要とされる資質と考えられる「協調性やチームワークの有無」「コミュニケーション能力」「表現力」「集団内での個性の発揮」「困難に直面した時の問題解決（をするための能力）」「人前に立ち発表することに慣れる」という項目について、入学前の自分と現在（実技発表後）の自分を比較したものである⁸⁾。表9に示されているとおり、全ての項目において6割以上の学生が資質の向上を実感していることがわかる。特に「表現力」や「人前に立ち発表することに慣れた」という項目では7割以上の学生が向上を実感している。保育者の専門性を考えるならばこれらの能力の向上

は就職後にも役立つものと考えられる。

表9. 入学前と実技発表会後の「変化」

		度数	列 %
協調性やチームワークが身についた。	-1	10	8%
	0	41	32%
	1	58	45%
	2	17	13%
	3	3	2%
コミュニケーション能力が向上した。	-1	9	7%
	0	37	29%
	1	60	47%
	2	20	16%
表現力が向上した。	-2	1	1%
	-1	6	5%
	0	33	25%
	1	53	41%
	2	27	21%
	3	9	7%
	4	1	1%
集団内で個性を発揮することができた。	-1	8	6%
	0	43	34%
	1	51	40%
	2	22	17%
	3	2	2%
	4	1	1%
困難に直面した時に問題を解決することができた。	-1	9	7%
	0	46	36%
	1	51	40%
	2	22	17%
	4	1	1%
人前に立ち発表することに慣れた。	-1	7	5%
	0	29	22%
	1	56	43%
	2	27	21%
	3	8	6%
	4	3	2%

5 まとめ

保育者を志す本学科の学生は、入学から卒業までの2年間の養成課程において、学内での多種多様な授業、学外での実習、そして段階的に取り入れられる「実技発表」等を通して、保育者に必要とされる資質と考えられる対人コミュニケーション能力や、企画運営能力、表現力の向上を実感している。特に実技発表に関しては次の4点が明らかになった。

1. 学生は「実技発表」を楽しみ、高い達成感を得ている。
2. 「実技発表」に関連する活動は、ゼミの結束力の強化をはじめとして短大生活に良い影響を与えている。
3. 「実技発表」は対人コミュニケーション能力の向上に効果がある。
4. 「実技発表」は保育技術の向上に効果がある。

このように、本学幼児保育学科生の保育者としての資質向上に関して「実技発表」の学習効果が認められるといえよう。しかしながら、今回の調査ではいくつかの課題も見つかった。たとえば、調査項目中、「実技発表」の内容にはこれまで学んだことが活かされているかどうかを問う項目がある。とてもそう思う 21%、そう思う 44%、どちらとも言えない

31%、そう思わない、全くそう思わないはそれぞれ 2%である。「実技発表」の実施時期や2年間の学習の集大成という行事の特性を考えるならば、本学科のカリキュラムを最大限に活かせるような指導を加えることにより、より学習効果が高まると考えられる。さらに「実技発表」後の調査の自由記述からは、練習場所、練習時間の確保、舞台上で使用可能な機材の拡充等、改善すべき点も浮きぼりとなった。今回の調査を通して得られた結果は今後の「実技発表」の充実に役立て、本学幼児保育学科生の保育者としての資質向上を図っていきたい。

注

- 1) 子どもの権利条約（児童の権利に関する条約）は、1989年、国連総会で採択された。広がる子どもの人権侵害を解決するために「子どもの最善の利益」を保証しようとうたわれている。
- 2) 2008年3月28日告示、2009年4月1日施行。
- 3) 2008年3月28日告示、2009年4月1日施行。
- 4) ③2008年度「実技発表会前」の調査と④2008年度「実技発表会後」の調査は解答用紙に学籍番号を記入させパネル調査の形式で実施している。
- 5) 「幼児保育学科学学生必携」P22、2007年。
- 6) 幼稚園・保育所に就職した卒業生を対象とした調査（インタビュー調査および質問紙調査）の結果、ほぼ全員に共通していたことが「実技発表が短大生活の一番の思い出になっているということ」「実技発表を通してゼミの絆が深まったこと」の2点である。自由記述欄いっばいに実技発表の思い出を綴る卒業生が多く、実技発表が学生の短大生活の中で重要な役割を果たしていたことが分かる。
- 7) 表8はパネルデータの特性を利用し1年次と2年次の回答の「差」に着目したものである。1年次と2年次の実技発表について同じ回答をした者は「0」、「1」は1年次よりも2年次の実技発表の方が一段階準備を頑張ったと回答したもの、「-1」は1年次の実技発表の方が2年次の実技発表よりも1段階準備を頑張ったと回答したということを示している。
- 8) 表9は、表8と同様に、入学前と2年次の回答の「差」に着目したものである。

参考文献

- 1) 矢藤誠慈郎他「保育士の資質・力量における養成校への役割期待—保育士への調査から—」『保育士養成研究』23巻、2005年。
- 2) 清水益治他「保育士の資質向上のためのシステム作り—保育士の自己評価・自己評価チェックリストをもとに—」『保育士研究』23巻、2005年。
- 3) 白石敏行「幼稚園教諭の資質向上のためのカリキュラムに関する研究」『山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』第18号、2004年。
- 4) 吉村英「保育者の資質に対する女子学生の意識—幼稚園教諭資質と保育士資質の比較—」『京都女子大学発達教育学部紀要』(3)、2007年。
- 5) 植田章編著『社会福祉援助技術』、建白社、2008年。
- 6) 田中亨胤他編著『保育者の職能論』、ミネルヴァ書房、2006年。
- 7) 大宮勇雄『保育の質を高める』、ひとなる書房、2006年。

付記

本稿は、平成20年度大阪国際大学特別研究費（教育研究助成課題番号4）による研究成果の一部である。